

日本語版恋愛信念尺度の作成と妥当性の検討

東 叶世 (奈良女子大学 文学部, wak_higashi @cc.nara-wu.ac.jp)

竹橋 洋毅 (奈良女子大学 文学部, takehashi.hiroki@gmail.com)

Development and validation of the Japanese version of the Romantic Beliefs Scale

Kanayo Higashi (Faculty of Letters, Nara Women's University, Japan)

Hiroki Takehashi (Faculty of Letters, Nara Women's University, Japan)

Abstract

Guided by the previous finding indicating that romantic beliefs are predictors of vulnerability to romantic scams, the present study developed a Japanese version of the Romantic Belief Scale (RBS) and examined its relationship with commitment to one's romantic partner. A total of 397 university students (190 males, 207 females, aged 18-25) responded to the Japanese version of the RBS. Subsequently, participants who reported being in a heterosexual intimate relationship ($N = 297$) completed established measures of romantic love (i.e., the Love and Liking Scale and the Love Attitudes Scale) as well as a scale assessing commitment to their partner. Confirmatory factor analysis identified four factors consistent with prior research: "Love Finds a Way," "One and Only," "Idealization," and "Love at First Sight." These RBS factors were significantly correlated with existing love scales. Moreover, each RBS factor was positively associated with levels of commitment to one's partner. These findings support the validity and reliability of the Japanese version of the RBS and suggest its utility in predicting romantic commitment, which may be linked to susceptibility to romance scams.

Key words

romantic love, romantic commitment, belief, idealization, romantic scams

1. 問題

1.1 はじめに

恋愛は青年において重大なものである。青年期には恋愛それ自体が生活や人間的な成長に強く影響することから(松井, 1996)、恋愛は発達において重要だと考えられる。また、親密な恋愛パートナーの獲得は、人の根本原理に迫ろうとする進化心理学でも重要な適応課題であると見なされている (e.g., Kenrick et al., 2010)。人々が様々な事柄について自身のふるまいを決定する際、本人が世界をどのようなものだととらえているかという信念が影響を及ぼすこと (Walton & Crum, 2021) から、恋愛に関する信念はパートナーとの関係や恋愛行動を考える上で有用な示唆をもたらすと考えられる。近年、恋愛関係になった後に献身を求められ、金銭を騙し取られるロマンス詐欺が深刻な社会問題となり、令和6年の年間被害総額は397億円に達する(警察庁, 2024)。この詐欺被害を考える上で恋愛についての信念の重要性が指摘されている (Buchanan & Whitty, 2014)。以上から、恋愛信念を測定し、それが対人関係の判断や意思決定にどのような影響を与えるのかを理解することは重要であるといえる。そこで本研究では、恋愛信念尺度を開発するとともに、恋愛信念と恋人への献身的傾向の関連を検討する。

1.2 恋愛信念についての先行研究

恋愛についての個人差研究では、イデオロギーとして

の側面と、現実の人間関係としての側面が区別されてきた (Sprecher & Metts, 1989)。恋愛への信念(イデオロギー)とは、個人が持つ恋愛に関する価値観や理想を指し、現実の恋愛関係とは必ずしも一致しない。例えば、「運命の人は存在する」と信じる人が、必ずしも恋人との関係に満足しているとは限らない。現実の恋愛関係の評価はその実際のありようが基礎にあるのに対し、イデオロギーである恋愛信念は自身の行動や将来恋人となりえる人または実際の恋人の行動を組織化し、評価するための認知的スキーマとして機能する (Sprecher & Metts, 1989)。行動指針となる点で、イデオロギーとしての恋愛信念は重要だとされる。

初期の恋愛信念研究としては、Hobart (1958) が挙げられる。この研究では「少女は、愛しい人に騎士道精神を期待すべきだ」といった項目を含む12項目の尺度が開発されている。しかしながら、当時の歌や映画を参考にした項目であるために、表現が古典的であり、時代にそぐわない表現の項目が含まれるという問題や、結婚観に関する項目が含まれるなど、恋愛についての信念を測定する上で適切とはいえない項目が含まれるという問題が指摘されている (Sprecher & Metts, 1989)。

この点を踏まえ、Sprecher & Metts (1989) は恋愛信念を測る尺度として Romantic Beliefs Scale (以下、RBS) を開発している。本尺度は、「道を切り開く愛 (Love finds a way)」、「唯一無二 (One and only)」、「理想化 (Idealization)」、「一目惚れ (Love at first sight)」の4因子構造で、全15項目で構成される。RBSの因子構造については、その後の研究において確証的因子分析が行われている。Adamczyk & Metts (2014) は、RBSのポーランド語版を開発し、「先

述の4因子構造」と「全てをまとめる1因子構造」のモデルについて適合度を比較した。その結果、4因子構造は1因子構造よりも適合度が高く、適切であることが示されている。

RBSの妥当性は、既存尺度との相関により確認されている。Sprecher & Metts (1989) では、道を切り開く愛、唯一無二、理想化が Love and liking scale (Rubin, 1970) と正に相関することが示された。また、Love attitudes scale (Hendrick & Hendrick, 1986) との関係では、4因子すべてがエロス (Eros; 美への愛) と正に相関し、道を切り開く愛と唯一無二がルダス (Ludus; 遊びの愛) と負に相関し、道を切り開く愛、唯一無二、理想化がアガペ (Agape; 愛他的な愛) と正に相関することが示された。これらの結果は、RBSの各因子が恋愛の既存尺度と関連を示す点で、尺度の妥当性を示すと考えられる。

さらに、RBSと恋愛行動の関連も指摘されている。Adamczyk (2015) では、恋人がいる大学生は、そうでない大学生と比べて道を切り開く愛と理想化の得点が低いことが示された。これは、これらの極端な恋愛信念を持たないことが、現実的な恋愛関係形成に寄与している可能性を示唆している。RBSはこのような恋愛関係の形成や維持だけでなく、恋愛関係における判断や信頼にも影響する可能性がある。実際に、ロマンス詐欺被害者はそうでないオンラインデート利用者よりもRBSの理想化の得点が高いことが示された (Buchanan & Whitty, 2014)。この知見は、ロマンス詐欺被害での献身的傾向の背景には理想化といった恋愛信念が存在し、被害抑止のためにはこのような心理への注目が重要であることを示唆している。

日本でのロマンス詐欺被害の急速な被害拡大を鑑みるならば、被害防止の観点からもRBSの日本語版の開発および基礎研究は重要であるといえるが、管見の限り、その研究報告は存在しない。恋愛に関する既存尺度としては、恋愛に対する態度尺度 (和田, 1994) や恋愛様相尺度 (高坂・小塩, 2015) が存在する。前者は恋愛への態度を多面的に測定することを目的とし、恋愛の重要性や賛否を問う態度項目が中心で、恋愛のもつ性質や影響についての認知である恋愛信念を純粋に測定するものではない。本尺度には因子負荷量が低い項目が散見されるという問題も存在する。後者は、現在進行中の恋愛関係における感情・状態を測定するために開発されたものであり、信念を測るものではなく、また恋愛をしていない者に対して使用することができないという限界が存在する。以上から、日本の既存尺度は恋愛信念のみを的確に測定する上では十分とはいえない。信念は物事の解釈に影響を及ぼすことで、自己成就的に将来の判断・行動に影響するため (Walton & Crum, 2021)、ロマンス詐欺被害を含む恋愛関連の判断・行動を説明・予測する上では恋愛信念のみに焦点をあてたRBSの邦訳版の作成が必要であると考えられる。

1.3 本研究の目的

本研究では、日本語版RBSを作成し、因子構造と妥当性を検討することを第一の目的とする。因子構造の検証については、Adamczyk & Metts (2014) に基づき、確証的因子分析を行う。妥当性検証についてはSprecher & Metts (1989) と同様に、Love and liking scale、Love attitudes scaleとの相関を分析する。また、ロマンス詐欺への示唆を得るため、RBSの4因子と恋人への献身の関係について検討することを第二の目的とする。ロマンス詐欺被害者の要因として理想化が挙げられていること (Buchanan & Whitty, 2014) から、恋人への献身的傾向とRBSの理想化の間には正の相関が予想される。

2. 方法

2.1 調査対象者と手続き

インターネット調査モニター500名 (男性250名、女性250名、18～25歳の学生) が調査に参加した。サンプルサイズは、努力の最小化傾向のために30%ほどデータが脱落する可能性を考慮し、確証的因子分析において推奨される300人以上を確保できることを考慮して設定した。本調査終了後に、努力の最小化傾向を抽出する項目 (「当てはまる」を選んでください) で不正解した者、および、RBSの15項目全て同じ回答をした者を除く397名 (男性190名、女性207名、年齢は $M = 20.53$, $SD = 2.09$) を因子分析の対象とした。

2.2 調査内容

2.2.1 日本語版恋愛信念尺度

RBSについて原著者から尺度の日本語版作成の許諾を得た上で、著者らが翻訳を行った。それらの訳出案について、英語に精通した文化心理学者がバックトランスレーションを行った後に、意味の同一性の確認を行い、最初の訳案が選定された。これらの項目案を試作版尺度として因子の弁別性を探る予備調査を行ったところ、因子内では項目間のニュアンスを近づけ、因子間ではニュアンスを遠ざける必要性が示唆され、最終調整を行った。この最終版は、文化心理学者によって、大意が同じであることが確認されている。本尺度では「あなたの考え方について伺います。以下の選択肢から、最も当てはまると思うものを一つ選んでください」という教示文を呈示し、各質問項目について7件法 (1. 全く当てはまらない～7. 非常によく当てはまる) で評定を求めた。

2.2.2 Love-Liking 尺度

本研究ではRubin (1970) に基づき藤原他 (1983) が作成した日本語版尺度を用いた。本尺度は、特定の他者へのロマンティックな愛情 (love) と好意 (liking) を測定する。本尺度では特定の他者を想定させる必要があるため、直前の設問において家族以外で最も親しい異性1名を想起させ、「恋人 (婚約者を含む)」、「ボーイフレンド・ガールフレンド (友達以上恋人未満)」、「片思い」、「親友」、「友人・知人」、「関わっている、もしくは、片思いをして

いる異性はいない」の選択肢を提示し、最後の選択肢を選んだ者以外（297名；男性138名、女性159名。年齢は $M = 20.56$ 、 $SD = 2.06$ ）に対してのみ調査を行った。愛情尺度11項目、好意尺度9項目の計20項目で、項目得点の平均を尺度得点とした。信頼性係数 α は、愛情尺度で.93、好意尺度で.91だった。9件法（1. 全くそう思わない～9. 非常にそう思う）を用いた。

2.2.3 Love attitudes 尺度

本研究では Hendrick & Hendrick (1986) に基づき、松井他 (1990) が作成した日本語版である Lee's love type scale second version (以下、LETS-2) を使用した。本尺度は、リーが提唱した恋愛の6類型に対応する恋愛関係の意識を測定する。本研究では Sprecher & Metts (1989) で有意な相関が見られた、エロス、ルダス、アガペの下位尺度を採用した。特定の他者を想定させて回答を求める必要があったため、分析対象は Love-Liking 尺度と同様だった。各9項目から構成され、項目得点の平均を尺度得点とした。信頼性係数 α は、エロスで.90、ルダスで.77、アガペで.91であった。5件法（1. まったく当てはまらない～5. よく当てはまる）で回答を求めた。

2.2.4 恋人への献身的傾向

金政 (2002) が作成した恋愛イメージ尺度の「献身的」因子の3項目を使用した。本尺度は恋愛における自己犠牲傾向を測定する。7件法（1. 全く当てはまらない～7. 非常によく当てはまる）により評定を求めた。項目得点の平均を尺度得点とした（ $\alpha = .67$ ）。

2.3 倫理的配慮

本調査は、調査協力者に匿名調査であり、プライバシーが守られること、協力が任意であること、協力を中止した場合に不利益はないことを教示した上で、「同意する」と回答した者のみに実施した。

2.4 分析方法

分析は HAD (清水, 2016) version 18.008 により行った。

3. 結果

3.1 日本語版 RBS についての確証的因子分析

日本語版 RBS が原版 (Sprecher & Metts, 1989) と同様の4因子構造であるかを確認するため、全15項目について最尤法による確証的因子分析を行った（表1）。この際15項目すべてが単一因子により説明されるという1因子モデルと、原版同様の4因子モデルを比較した。その結果4因子モデル（ $\chi^2(84) = 205.522$, $p < .001$, GFI = .935, AGFI = .907, CFI = .937, RMSEA = .060, AIC = 277.522）は1因子モデル（ $\chi^2(90) = 353.069$, $p < .001$, GFI = .881, AGFI = .842, CFI = .863, RMSEA = .086, AIC = 413.069）よりも適合度が良好だった。尺度得点は、先行研究に基づき、その因子に内包される項目の得点を平均することで算出した。信頼性係数 α は、道を切り開く愛が.85、唯一無二が.67、理想化が.69、一目惚れが.41で、一目惚れの信頼性は低かった。本研究と同様に、Adamczyk & Metts (2014) でも一目惚れ因子の1項目の因子負荷量が極端に低いことが報告されているものの、それを含めて尺度化がされている。先行研究との比較のため、本論文でも同様の尺度

表1：日本語版恋愛信念尺度の確証的因子分析の結果

因子と項目	負荷量
「道を切り開く愛」因子（ $\alpha = .85$ ）	
12 どんな違いや問題が生じて、もし私が誰かと愛し合っているなら、一緒に乗り越えられると信じている。	.75
9 交際への反対、遠距離、他のどんな障害に拘わらず、もし私が誰かを愛するなら、一緒にいる方法を見つけるだろう。	.71
8 どんな障害があっても、もし私が誰かを愛するなら、その関係をうまくいかせられると思う。	.70
11 私の恋人関係では、恋愛感情が本当に長続きすると予想する。時間が経っても、薄れることはないだろう。	.70
10 もし関係が運命だったなら、どんな障害（例、お金のなさ、遠距離、人生設計の違い）でも乗り越えられる。	.68
7 親や友人から反対されても、もし私が誰かを愛していたら、その人と一緒にいるだろう。	.60
「唯一無二」因子（ $\alpha = .67$ ）	
2 本当の愛は、私にとって、ただ一つだけのものだろう。	.74
3 本当の愛とは、その一つの愛が永遠であることだと信じている。	.68
1 「真実の愛」を一度経験したら、他の人と、同じ程の愛を、もう二度と経験できないだろう。	.48
「理想化」因子（ $\alpha = .69$ ）	
13 私が「真実の愛」を手にする時の恋人との関係は、完璧に近いだろう。	.70
15 ずっと一緒にいると決めた恋人について、新しく知ること何かも全て、私を喜ばせる。絶対そうだ。	.68
14 私が愛する人は、完璧な恋人になる。例えば、完全に受容してくれて、愛情深く、理解してくれる人だ。	.58
「一目惚れ」因子（ $\alpha = .41$ ）	
6 私が「真実の愛」を見つけたら、出会ったその瞬間に、たぶんそれだとわかるだろう。	.71
5 私はふさわしい人に出会ったら、ほぼその瞬間に、たぶん恋に落ちるだろう。	.55
4 一定の期間をかけて知らない相手とは、私は恋に落ちない。（逆転項目）	-.20

化を行った。

3.2 日本語版恋愛信念尺度の妥当性

日本語版 RBS の妥当性を検証するために、Love-Liking 尺度、LETS-2 との相関を算出した（表 2）。その結果、RBS の 4 因子すべてが愛情尺度と正に相関した。道を切り開く愛、唯一無二、理想化は好意と正に相関した。また、RBS の 4 因子すべてがエロスとアガペと正に相関したが、理想化のみがルダスと正に相関した。

3.3 日本語版 RBS と恋人への献身的傾向の関連

RBS と恋人への献身的傾向との関連を調べるために、相関分析を行った（表 2）。その結果、RBS の 4 因子と恋人との献身的傾向の間に中～大の正の相関がみられた。各因子の独自効果を探るため、他の RBS3 因子を統制した偏相関分析を実施した。その結果、道を切り開く愛で .17 ($p < .01$)、唯一無二で .21 ($p < .01$)、理想化で .22 ($p < .01$)、一目惚れで .12 ($p < .05$) という偏相関がみられた。

4. 考察

本研究の目的は、第一に日本語版 RBS を作成し、その妥当性を検証すること、第二に献身的行動との関連を検討することであった。

確証的因子分析の結果、原版と同様に、4 因子モデルの適合度が良好であった。これは Adamczyk & Metts (2014) と一致する。一目惚れ因子の項目 4 は因子負荷量が -0.20 と低かったが、原版でも IT 相関も低く (Sprecher & Metts, 1989)、ポーランド語版でも .09 と低かった (Adamczyk & Metts, 2014) ことから、先行研究と大きく異なる結果であると考えられる。一目惚れ因子の信頼性係数 α は .41 だったが、原版で .57、ポーランド語版で .53 であり、低さは共通していた。以上から、全体として原版の構造が再現されていると言える。なお、因子間相関に関し、一部高い相関が見られたが、ポーランド語版でも同様である。因子の独立性に課題は残るが、モデル適合の結果を踏まえると、本尺度は 4 因子構造が妥当であると考えら

れる。

妥当性の検討のための相関分析の結果、道を切り開く愛、唯一無二、理想化は愛情と好意と正に相関し、これらの結果は先行研究 (Sprecher & Metts, 1989) と一致する。一目惚れは、愛情と正に相関し、好意と相関しなかった。後者は先行研究と一致し、前者は先行研究とは不一致であるが、本研究でみられた一目惚れと愛情の相関は小さく、大きな相違があるとはいえない。また、RBS の 4 因子すべてがエロスとアガペと相関し、係数の値は道を切り開く愛が最も大きかった。これらの結果は Sprecher & Metts (1989) とおおむね一致する。一目惚れとアガペの間には先行研究では有意な相関が見られていないが、本研究の相関も .22 で道を切り開く愛などの因子と比べるならば低めであり、その意味では先行研究と共通したパターンが見られると解釈しうる。以上の結果は、日本語版 RBS が先行研究と近い形で恋愛の既存尺度と相関することを示唆し、全体的には尺度妥当性が確認されたといえる。

ただし、先行研究とは異なるパターンの相関も見られた。それは、RBS とルダスの相関である。本研究ではルダスが理想化とだけ正に相関したのに対し、Sprecher & Metts (1989) では道を切り開く愛や唯一無二とだけ負に相関していた。この違いは、文化差の点から解釈が可能である。文化的自己観 (北山・宮本, 2000) や関係流動性 (Yuki & Schug, 2012) の観点に基づく、東洋では西洋より義務や役割が重要視され恋愛関係も自由より義務に従いやすいと考えられる。このことを踏まえると、東洋では義務的な関係からの逸脱こそが愛情の真正性をシグナルする上では重要となるため、自由な恋愛のルダスが理想化と相関したのに対して、西洋ではそもそも自由意思が重視され恋愛の選択も自由が前提のため、ルダスは奔放の証でしかない可能性が考えられる。実際に、ルダスの意味合いが文化によって異なりうることが報告されている (Neto et al., 2000)。ルダスの文化的意味合いの違いは、恋愛の文化差への示唆をもたらす可能性があるため、今後さらなる検討が求められる。

表 2：記述統計量と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>r</i>								
			1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 道を切り開く愛	4.27	1.08									
2. 唯一無二	4.19	1.16	.50 **								
3. 理想化	4.22	1.16	.64 **	.46 **							
4. 一目惚れ	3.91	0.94	.35 **	.23 **	.41 **						
5. 愛情	5.29	1.75	.40 **	.30 **	.29 **	.18 **					
6. 好意	5.73	1.51	.27 **	.28 **	.24 **	.11	.58 **				
7. エロス	3.08	0.89	.36 **	.20 **	.35 **	.24 **	.70 **	.37 **			
8. ルダス	3.02	0.69	.04	.09	.18 **	.05	.19 **	.15 *	.34 **		
9. アガペ	2.99	0.90	.39 **	.23 **	.31 **	.22 **	.69 **	.44 **	.69 **	.29 **	
10. 恋人への献身的傾向	4.22	1.20	.50 **	.45 **	.51 **	.33 **	.33 **	.27 **	.30 **	.17 **	.38 **

注：** $p < .01$, * $p < .05$ 。

RBS の理想化がロマンス詐欺被害の要因かもしれないという Buchanan & Whitty (2014) の知見をもとにして、本研究では新たに RBS と恋人への献身的傾向との相関を検討した。RBS の 4 因子は恋人への献身的傾向と中～大の相関が示された。また、偏相関分析の結果から、4 因子すべてが恋人との献身的傾向と独自の相関をもつことが示唆された。これらの結果は、恋人への献身的傾向が様々な恋愛信念と関わるものであることを示唆する。恋愛での困難は乗り越えられ、愛は唯一無二で、恋人は完璧で、出会った瞬間に恋に落ちると信じることは、その恋人が投資対象としての価値が高く、強いコミットメントを生じさせるのかもしれない。ただし、Buchanan & Whitty (2014) ではロマンス詐欺被害と関連していたのが理想化だけであり、その点では相違があるといえる。詐欺で巨額を騙し取られる上では、相手を疑わないことが大きく影響すると考えられることから、恋人を完璧と信じ込む理想化は極端なレベルの献身と特に関連しているかもしれない。今後、恋愛信念と恋人への献身の関係についてさらに検討していくことが求められる。

本研究の意義としては、次の 3 つが挙げられる。第一に、日本語版 RBS を作成し、因子構造と妥当性を検討したことである。これにより、RBS を用いた国内研究の基礎を提供できる。第二に、恋人への献身と恋愛信念の関連が示されたことである。これにより、ロマンス詐欺で背景要因を知る手がかりとなる可能性が示唆された。第三に、ロマンス詐欺予防に向けた研究や啓発活動に本研究や RBS が示唆を与える可能性がある。RBS がロマンス詐欺被害者の弁別に有益だという Buchanan & Whitty (2014) を追試するとともに、認知・行動傾向との関連を実験により精緻に調べることが重要な課題である。その上で、それを啓発や予防活動に繋げるための介入研究が重要だろう。

最後に、本研究の制約と展望を述べる。第一に、因子負荷量の低い項目や信頼性係数が低い因子が存在することである。これは先行研究と一致していたものの、今後さらなる検討が必要であろう。第二に、本研究の対象者が学生のみであった点である。先行研究でも対象者は大学生のみだったが、日本語版 RBS の幅広い活用を目指す上では、年齢範囲を広げた検討が必要であろう。第三に、恋人への献身的傾向と恋愛信念の関連は、あくまでも相関であり、因果関係を示すものではないことである。ロマンス詐欺の予防を見据えるならば、恋人への献身を増減させる要因を実験法により検討する必要がある。これらの検討は、恋愛信念を測り、真の影響をとらえる上で有益だろう。

謝辞

尺度のバックトランスレーションには鳥山理恵先生のご助力を賜った。深く御礼申し上げます。

引用文献

Adamczyk, K. & Metts, S. (2014). The factor structure of the

Polish-Language version of the Romantic Beliefs Scale. *Psychologiske Teme*, 23, pp. 209-222.

Adamczyk, K. & Metts, S. (2015). Romantic beliefs and Polish young adults' relationship status. *Revue Internationale de Psychologie Sociale*, 28, pp. 7-28.

Buchanan, T. & Whitty, M. T. (2014). The online dating romance scam: Causes and consequences of victimhood. *Psychology, Crime & Law*, 20, pp. 261-283.

藤原武弘・黒川正流・秋月左都土 (1983). 日本版 Loving Liking 尺度の検討 情報行動学研究. 広島総合科学部紀要 III, 7, pp. 39-46.

Hendrick, C. & Hendrick, S. (1986). A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, pp. 392-402.

Hobart, C. W. (1958). The incidence of romanticism during courtship. *Social Forces*, 36, pp. 362-367.

金政裕司 (2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から—。対人心理学研究, 2, pp. 93-101.

警察庁 (2024). 令和 6 年における特殊詐欺及び SNS 型投資・ロマンス詐欺の認知・検挙状況等について (暫定値版). https://www.npa.go.jp/bureau/criminal/souni/tokusyusagi/hurikomesagi_toukei2024.pdf. (閲覧日: 2025 年 4 月 13 日)

Kenrick, D. T., Griskevicius, V., Neuberg, S. L., & Schaller, M. (2010). Renovating the pyramid of needs: Contemporary extensions built upon ancient foundations. *Perspectives on Psychological Science*, 5, pp. 292-314.

北山忍・宮本百合 (2000). 文化心理学と洋の東西の巨視的比較—現代的意義と実証的知見—. 心理学評論, 43, pp. 57-81.

高坂康雄・小塩真司 (2015). 恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 発達心理学研究, 26, pp. 225-236.

松井豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 (1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成. 東京都立立川短期大学紀要, 23, pp. 13-23.

松井豊 (1996). 親離れから異性との親密な関係の成立まで. 斎藤誠一 (編). 青年期の人間関係. 培風館, pp. 19-54.

Neto, F., Mullet, E., Deschamps, J.-C., Barros, J., Benvindo, R., Camino, L., Falconi, A., Kagibanga, V., & Machado, M. (2000). Cross-cultural variations in attitudes toward love. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 31, pp. 626-635.

Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, pp. 265-273.

清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD—機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—. メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, pp. 59-73.

Sprecher, S. & Metts, S. (1989). Development of the 'Romantic Beliefs Scale' and examination of the effects of gender and gender-role orientation. *Journal of Social and Personal Rela-*

tionships, 6, pp. 387-411.

和田実 (1994). 恋愛に対する態度尺度の作成. 実験社会心理学研究, 34, pp. 153-163.

Walton, G. M. & Crum, A. J. (eds.) (2021). *Handbook of wise interventions: How social psychology can help people change*. The Guilford Press.

Yuki, M. & Schug, J. (2012). Relational mobility: A socioecological approach to personal relationships. In O. Gillath, G. Adams, & A. Kunkel (eds.), *Relationship Science: Integrating evolutionary, neuroscience, and sociocultural approaches* (pp. 137-151). Washington, DC: American Psychological Association.

受稿日：2025 年 4 月 14 日

受理日：2025 年 5 月 7 日

発行日：2025 年 6 月 30 日

Copyright © 2025 Society for Human Environmental Studies



This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-Non-Commercial-NoDerivatives 4.0 International] license.



<https://doi.org/10.4189/shes.23.99>